

研究紀要創刊の辞

文化創造研究科長
久保朝孝

平成25年4月1日、本学大学院は既存の研究科の教育研究分野を維持するとともに大胆な再編統合を行い、二つの新たな研究科を開設しました。その一つが文化創造研究科（旧研究科名称の一つをそのまま踏襲）です。専攻は文化創造専攻のみとし、5つの領域をもって組織する博士課程大学院としました。新研究科の領域名（対応する旧研究科の専攻・コース名）は次の通りです。

- | | |
|------------------|-------------------------------|
| ①国文学領域 | （旧文学研究科文学専攻国文学コース） |
| ②クリエイティブライティング領域 | （旧文化創造研究科創造表現専攻） |
| ③図書館情報学領域 | （旧文学研究科文学専攻図書館情報学コース） |
| ④メディアコミュニケーション領域 | （旧現代社会研究科現代社会専攻メディアプロデュースコース） |
| ⑤都市環境デザイン領域 | （旧現代社会研究科現代社会専攻都市環境デザインコース） |

科学技術の発展により、人類の文明は長足の進歩を遂げてきましたが、特に前世紀からの驚異的展開は、皮肉なことに一方では精神文化の荒廃を招来してもいます。その結果、現代社会には様々な異変が生じ、文明が本来目指していたものと相反する事態、すなわち暮らしにくい世の中が現出することになってしまいました。

そのような現代社会を生きる我々は、古人の精神的到達と蓄積された知恵とに学び、一方では文明の本質を見極めかつその成果としての利器を使いこなしながら、生活の規範ともいべき新しい「文化」を「創造」していかなければなりません。ともすれば、「文化」という言葉はスタティック（静的）な印象として捉えられがちでしたが、多様性に満ちた現代社会を生きるための「文化」は、否応なくアクティブ（動的）なものにならざるを得ません。研究科の名称を「文化創造」と銘打つ理由がここにあります。

現代社会が要請する科学技術と精神文化との融合のあり方について、「文化創造」という観点から思索し、凝視し、発見し、提案していくことが、本研究科の使命であると考えます。そのために、文学、文芸、情報学、メディア、造型デザインという、「表象」という点で共通項を持つ異分野をあえて1専攻にまとめました。同時に、5領域の一つを学びのホームグラウンドとして定め、そこを基点としてさらにその他の領域にも幅を広げることのできる教育課程としました。

本研究科は、各領域の専門的な研究を深めるとともに学際的視野をも身につけ、それにより高次元の創造的表現を追究することを教育目的とします。

本学の教育理念及び教育目標を標語化したキーセンテンスは次に掲げる通りですが、大学院においてもその目指すところは変わりません。これらの考え方は、本研究科の教育課程、教員配置、授業内容、時間割編成及び指導方法など、教育研究の様々な場面に生かされています。

違いを共に生きる（多様な価値観を認め合う共生社会の実現）……………教育理念

- (i) 地域に根ざし、世界に開く（グローカリズムの実践）
- (ii) 変わる（すぐに役立つ）ものと変わらないものを共に大切にする（革新と伝統の共存）
- (iii) たくましさとやさしさを共に大切にする（生きる力と生きる意味の具備）

伝統は立ち止まらない（知的遺産の継承と新たな知の創造）……………スローガン

さて、いずれの大学・大学院も、その研究成果を社会に公表する義務を負っています。本研究科では、教員および大学院学生が研究成果を公表する場として、年刊の「紀要」を刊行することにしました。年度当初より編集委員会を組織してその準備に当たってききましたが、このたび創刊号を発刊する運びとなりました。研究科開設初年度の創刊はなかなか困難なことも多かったはずですが、それが実現できたのは編集委員長を中心とする編集委員会の一方ならぬ尽力によるものであったことをここに明記して、感謝の意を表したいと思います。

なお、本研究科の「紀要」は、愛知淑徳大学リポジトリ「ASKA-R(Aichi Shukutoku Knowledge Archive Repository)」により電子公開されます。これは、本学で生み出された学術成果を永続的に蓄積・保存し、インターネットを通して学内外に無償で発信・提供するものです。一般には機関リポジトリと呼ぶもので、本学では図書館により2011年4月1日から運用されています。いつでも、どなたでも、どこからでも、本学の研究成果を閲覧できる態勢が整えられています。

研究成果は公表されて終わるものではありません。むしろ、成果として公表された仮説・試案に対する様々な角度からの検証・批判とそれらへの反論・修正により、いっそうその精度を高めていくものでしょう。そのような意味で、第一段階としての開かれた研究成果発表の場の確保は、研究機関にとって生命線と言って過言ではありません。このたび創刊に至った「愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要」が、その機能を担い続けることを期待してやみません。
(2014年1月記す)